様式１：小学校

令和６年度　浜松市　英語教育改善プラン

目標

外国語に慣れ親しみ、言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育む。異文化に対する理解を深め、グローバル社会で活躍できる児童の育成と教員の指導力向上を図る。

１．目標に対する現状

改善が進んだ点

① 全ての学校が「Can-Doリスト」形式による学習到達目標を設定している。
（R4:89.6%⇒R5:100%）

②「『教師とのやり取りを児童に示すやり取り・発表のモデル提示』にALTが参画した学校の割合」が高い。
（R4:100%⇒R5:100%）

未だ改善が必要な点

❶「授業中、50%以上の時間、言語活動を行っている学校の割合」が昨年度から減少した。
（R4:91.1%⇒R5:88.5%）

❷「『児童が学習者用デジタル教科書を活用した授業』を実施した学校の割合」が、昨年度から減少した。
（R5:75.0%）

２．要因分析

①浜松市版「Can-Doリスト」形式の学習到達目標例を市内小中学校へ配布し、周知したことが、学習到達目標の設定状況の改善につながったと考えられる。

②ALTが全校へ配置される中で、ALTとのティーム・ティーチングの質が高まったり、ALTが教育活動へ参画する割合が増えたりしたことが要因と考えられる。

❶「言語活動を通して資質・能力を育成する」ことに焦点を当てた研修を十分に行うことができなかったことが要因と考えられる。

❷「学習者用デジタル教科書」の活用事例とその効果等が十分に周知されていないことが要因と考えられる。

３．目標を達成するための施策・事業

①❶「Can-Doリスト」形式の学習到達目標が設定されているものの、その活用方法には改善の余地がある。教育センター主催の授業づくり研修や学校訪問等で、「学習到達目標を踏まえた目標と指導と評価の一体化の在り方」や「言語活動を通して資質・能力を育成すること」について焦点を当てた研修を実施する。また、「話すこと」の力の育成に向けて、ＭＥＸＣＢＴ上のＣＢＴ問題を積極的に活用する。ＣＢＴ問題の具体的な活用方法について、市内小学校へ周知することで、授業改善を推進する。
②ALTとのティーム・ティーチングやALTの活用方法について、より理解を深めることを目的とした、教育センター主催の「ALTとの連携研修」を実施する。
❷授業づくり研修や学校訪問等で、「学習者用デジタル教科書」の活用の好事例やその教育的効果を周知する。
※いずれの研修会においても、mextchannel 等から好事例を取り上げ、授業改善の方向性を示す。

【一定の英語力を有する小学校教師の新規採用に係る取組について】
・採用選考試験において、以下の英語資格を有する者に２段階で加点を行い、小学校受験希望者に英語力の必要性を示す。
＜第１段階＞中学校免許状、英語検定２級、TOEFL iBT 60点以上、TOEIC 600点以上
＜第２段階＞英語検定準１級、 TOEFL iBT 72点以上、TOEIC 785点以上

様式１：中学校

令和６年度　浜松市　英語教育改善プラン

目標

言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育む。異文化理解を深め、グローバル社会で活躍できる生徒を育成するとともに、学びのつながりを意識した教員の指導力向上を図る。

CEFR A1レベル相当以上の英語力を取得または有すると思われる生徒の割合（R5：48.0%⇒R6：50.0%以上）

１．目標に対する現状

改善が進んだ点

①「授業中、50%以上の時間、言語活動を行っている学校の割合」が増加した。
（R4:84.7%⇒R5:86.8%）
②英語教育に関する小中連携の状況及び取組内容に改善が見られた。
（R4:35%⇒R5:91.7%）

未だ改善が必要な点

❶CEFR A1レベル相当以上の英語力を取得または有すると思われる生徒の割合が、未だ目標数値を達成していない。
（R4:45.3%⇒R5:48.0%）
❷全国学力・学習状況調査で、「話すこと」においては、即興で話すこと（「話すこと」1 (3) 正答率9.0%）、「書くこと」においては、まとまりのある文章を書くこと（8 (2) 正答率8.8%）に関して、特に課題が見られた。なお、課題のあった当該領域のパフォーマンステストの両方を実施している学校の割合が昨年から減少している。（R4:93.1%⇒R5:76.4%）
❸「『生徒が学習者用デジタル教科書を活用した授業』を実施した学校の割合」が、昨年度から減少した。（R5:79.2%）

２．要因分析

①❶❷言語活動を設定した上で授業改善が進んでいるものの、資質・能力の育成につながる言語活動が十分に行われていないことが要因と考えられる。

②英語教育における小中連携の在り方について考える研修を、年間を通して設けられたことが要因と考えられる。

❷「話すこと」「書くこと」の領域において、実生活に即した魅力的な言語活動が設定された授業づくりについての理解が、不十分であったことが要因と考えられる。

❸「学習者用デジタル教科書」の活用事例とその効果等が十分に周知されていないことが要因と考えられる。

３．目標を達成するための施策・事業

①❶❷「学習到達目標を踏まえた目標と指導と評価の一体化の在り方」や「『話すこと』『書くこと』の資質・能力を育成する言語活動」について焦点を当てた教育センター主催の授業づくり研修を実施する。
②小中連携に焦点を当てた教育センター主催の授業づくり研修を実施したり、学校訪問等で小中連携の必要性や意義について、具体を挙げて説明したりする。

❶❷目標と指導と評価の一体化を踏まえた「話すこと」「書くこと」に関する授業づくり研修において、パフォーマンステスト等におけるＭＥＸＣＢＴ上のＣＢＴ問題の具体的な活用方法について、市内中学校へ周知する。また、生徒が目的や場面・状況に応じて、まとまりのある文章を書く力等を測るための指標の一つとして、市学力調査にＣＢＴ問題と同様の趣旨の問題を取り入れ状況を分析する。
❸授業づくり研修や学校訪問等で、「学習者用デジタル教科書」の活用の好事例やその教育的効果を周知する。
※いずれの研修会においても、mextchannel 等から好事例を取り上げ、授業改善の方向性を示す。

様式１：高等学校

令和６年度　浜松市　英語教育改善プラン

目標

言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり、適切に表現したり、伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を身に付けた、様々な分野・地域で国際社会の一員として活躍できる生徒を育成するとともに、教員の指導力向上を図る。

CEFR B1レベル相当以上の英語力を取得または有すると思われる生徒の割合（R5：65.6%⇒R6：70.0%以上）

１．目標に対する現状

改善が進んだ点

①全ての授業において、生徒が50%以上の時間、言語活動を行っている。
（R4:100%⇒R5:100%）

②CEFR A2、B1レベル相当以上の英語力を取得または有すると思われる生徒の割合が目標値を上回った。
（R5:A2　82.7%、B1　65.6%）
（目標値:A2　75%、B1　50%）

未だ改善が必要な点

❶パフォーマンステスト「話すこと」「書くこと」の両方を実施している割合が昨年から減少した。
（R4:80.0%⇒R5:66.7%）

❷授業における英語担当教師の英語使用状況に関して、授業の50%以上を英語で行っている教師の割合が減少した。
（R4:80.0%⇒R5:66.7%）

２．要因分析

①学校訪問時に、学習指導要領で求められている資質・能力、言語活動の具体について研修を行ったことが、言語活動の充実につながったと考えられる。
②「Can-Doリスト」形式の学習到達目標が設定され、生徒と共有されていることが、生徒の英語力向上につながっていると考えられる。

❶目標と指導と評価の一体化を踏まえた「話すこと」「書くこと」に関する授業づくりについて考える研修が、不十分であったことが要因と考えられる。
❷生徒が英語に触れる機会を充実させる必要性や「授業は英語で行うこと」を基本とすることについての理解が十分でないこと、生徒の理解の程度に応じた英語を用いることが意識されていないことが要因と考えられる。

３．目標を達成するための施策・事業

①②❶教育センター主催の授業づくり研修で、「学習到達目標を踏まえた目標と指導と評価の一体化の在り方」や「『話すこと』『書くこと』の資質・能力を育成する言語活動」について焦点を当てた研修を実施し、オンデマンド配信を行う。また、４技能それぞれの言語活動だけでなく、４技能を効果的に活用した技能統合型の言語活動の充実についても、具体を示していく。なお、静岡県教育委員会が行う研修への参加を奨励していく。
　特に、「話すこと」「書くこと」の力の育成に向けては、ＭＥＸＣＢＴ上のＣＢＴ問題を積極的に活用する。パフォーマンステスト等におけるＣＢＴ問題の具体的な活用方法について周知することで、授業改善を推進する。また、生徒の英語力を測るための指標の一つとしてもＣＢＴ問題を活用していく。
※教育センター主催の研修会で、mextchannel 等から好事例を取り上げ、授業改善の方向性を示す。

❷授業づくり研修で、学習指導要領で示されている「授業は英語で行うことを基本とすること」の必要性とその意義について具体を挙げて説明する。また、教師の英語力向上に向けて、外部検定試験の特別受験制度の積極的な活用を促す。

目標達成状況一覧表

令和6年度様式（様式2）

浜松市教育委員会

浜松市教育委員会管轄の高等学校は1校のみのため、一部非公表としています。

校種	指標内容		2023 目標値	2023 達成値	2024 目標値	2024 達成値	2025 目標値	2025 達成値	2026 目標値	2026 達成値	2027 目標値	2027 達成値
高等学校	①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（%）											
	①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（%）											
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（%）		100	100.0	100		100		100		100	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した割合（%）		80	66.7	80		80		80		80	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（%）	100	100.0	100		100		100		100	
		公表（%）	100	100.0	100		100		100		100	
		達成状況の把握（%）	100	100.0	100		100		100		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（%）		70	90.9	90		90		90		100	
	⑥英語担当教員の授業における英語使用状況（%）		80	66.7	80		80		80		85	

校種	指標内容		2023 目標値	2023 達成値	2024 目標値	2024 達成値	2025 目標値	2025 達成値	2026 目標値	2026 達成値	2027 目標値	2027 達成値
中学校	①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（%）		50	48.0	50		55		55		60	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（%）		88	86.8	90		90		90		90	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した割合（%）		95	76.4	95		95		95		95	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（%）	100	100.0	100		100		100		100	
		公表（%）	55	47.9	55		60		60		60	
		達成状況の把握（%）	80	64.6	80		80		80		80	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（%）		50	42.9	50		50		60		60	
	⑥英語担当教員の授業における英語使用状況（%）		85	80.6	85		85		85		90	

校種	指標内容		2023 目標値	2023 達成値	2024 目標値	2024 達成値	2025 目標値	2025 達成値	2026 目標値	2026 達成値	2027 目標値	2027 達成値
小学校	「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（%）	92	100.0	100		100		100		100	
		公表（%）	33	36.5	50		50		50		60	
		達成状況の把握（%）	68	70.8	80		80		80		90	